目覚めた時の自分の第一声が、
「おお…、睫毛も銀色」
だった。アホな第一声だな、と我ながら呆れる。
囁きに近い声だったが、拳一個分ほどの至近距離では充分だったらしい。閉じられていた目の前の瞼がぱちりと開いた。真ん丸の金色の瞳が現れて、ぼんやりと赤葦を映す。
「下も銀色なの、知ってんじゃん？」
赤葦に負けず劣らずアホな第一声を発した木兎は、ふぁーっと大きな欠伸をして、赤葦の首筋に手を当てた。
「よかった。熱、下がったな」
「はあ」
視線を巡らせ、赤葦は状況把握に努めた。
灯りの消えたこの部屋は赤葦の部屋で、今木兎と顔を突き合わせるようにして寝ている場所は赤葦のベッドだ。正確な時間はわからないが、カーテンの隙間から薄っすらと光が差しているから恐らく明け方なのだろう。

つまり、木兎と同じベッドで朝を迎えた。
自分はパジャマ代わりのいつもの長袖Ｔシャツを身につけていて、見る限り木兎も服を着ている。半袖のようだが。……下も、お互い、穿いている。たぶん。
「また失礼なこと考えてるなー、おまえ。俺が病人襲うわけねえじゃん」
「びょうにん……」
「そこも覚えてねえの？　どこから記憶飛んでんだよ」
「ところどころは覚えてますけど……、はっきり覚えているのは、公園に木兎さんが来たところまでですかね」
「そこかよー」
木兎は呆れたように苦笑いした。
「おまえね、今度から倒れる時は家のすぐそばにして」
「そんな都合よく……」
「ていうか倒れるのやめて。心配で木兎さん泣いちゃうから」
「泣いたんですか？」
「半泣き。赤葦、すげー熱で、体は熱いのにガタガタ震えて寒い寒いって言うし。あちこち痛いって言うし。風邪うつるから部屋出て行けって言ったあとに寂しいからぎゅうって

してって言うし」
「話盛ってません？　特に最後のとこ」
「盛ってねえよ」
ばつが悪くて疑ってみたが、言われてみるとその辺りの記憶はおぼろげながらにも蘇ってくる。
ちゃんと覚えている方がよかったのか、完全に記憶が飛んでいる方がよかったのかはわからないが。
昨日、木兎の彼女が部屋に来て、体調の悪い赤葦が外に飛び出した。
「はい、もうそこから違う。彼女じゃないし。部屋に上げてない」
「じゃああの人、木兎さんのなんなんです？　なにしに来たんですか？」
「なにって、バレー部のマネージャー。俺が体育館に忘れた物、届けに来てくれた。……隠すの嫌だから言うけど、告られてるのは事実。すげーアプローチされてんのも事実。だからいきなり家に来たりするんだろうけど。でも俺好きな子いるから無理ですって何度も断ってる」
「……好きな子」
「ちゃんと言ったじゃん。なんでその大事なとこ忘れちゃうのー」

「忘れてません！　たぶん！　ちょっと混乱してるから、今最初から記憶整理してるんじゃないですか！」
　むきになって大声を出そうとして咳き込んだ。ベッドヘッドに置いてあったスポドリを赤葦に飲ませ、苦笑いしながら木兎が背中を擦ってくれる。その感触で、また記憶が鮮明になった部分がある。熱で痛む腰や背中を木兎はずっと擦ってくれていたのだ。こまめに額の熱冷却シートを貼りかえ、水分もとらせてくれた。赤葦は震えながら「寒い」を連発し、温めてくださいと言ったり、風邪がうつるからもう部屋に戻ったほうがいいです、と言いつつ木兎の腕を掴んで離さなかった。
『やっぱりいかないで。そばにいてください。ぎゅうってして』
　あああああ、もう!!
　自分の愚行（と言えるだろう）をはっきり思い出し、木兎と顔を突き合わせているのが耐えられずに上掛けを頭から被った。
「昨晩は……大変ご迷惑をお掛けしまして、申し訳ございませんでした……」
「いいよ別に。赤葦のわがまま、めっちゃ貴重。すげー可愛かったし。ていうか全部思い出したの？」
「……そばにいてください、あたりまで」

「まだそこか」
「……いや、そのあとも、おぼろげながらには思い出しているようないないような……」
「ふぅん」
　木兎は赤葦が頭から被っている上掛けをむりやり剥がし、ベッドから逃げようとする赤葦の体を両腕で拘束し、目が覚めた時のように顔を突き合せる状態にした。力で敵うわけがないので、抗うのは早々に諦めた。せめてもと、顔を背けて視線だけは合わせないようにしたが。
「無駄な抵抗だな」
「……」
「赤葦、熱下がったよな？」
「……たぶん」
「じゃあもう、いいか」
　なにが、と訊き返す前に唇を塞がれた。うなじを木兎の大きな手で押さえられて、顔が動かせなかった。尤も、そんな風に押さえられていなくても、驚きで固まって動くことなどできなかったが。
　薄く開いていた唇の隙間を、木兎の舌先が這う。濡れた感触に驚いているうちに、肉厚

の舌が口内へと入ってきた。
「んっ……っ」
奥に逃げ込んでいた赤葦の舌を木兎のそれが捕まえる。そっと柔らかく撫でられ絡められて吐息が漏れた。
「ふっ……ぅ」
口内の熱さと唾液が混ざり合う。とても甘い。さっき飲まされたスポドリの甘さか、木兎の唾液の甘さかわからなかったけれど、もっといっぱい味わいたいと思った。
『風邪が治ったら、キスしてください』
数時間前に自分が言ったであろう言葉を唐突に思い出した。だから木兎は今自分にキスをしているのだ。
（治ったらって、熱が下がってすぐってことじゃないだろ、ふつう……）
少し呆れもしたが、それ以上に嬉しかった。赤葦はずっと、木兎のキスが欲しかったのだ。押し返そうと木兎の胸に当てていた手の力を抜いて背中にまわす。もっと、と伝えるために。
今まで木兎が赤葦に触れていた時、こめかみや頬、耳元、首筋、胸と、あちこちにキスは落とされた。でも、口には一度もしてくれなかった。思い切って、して欲しいと目で訴

えたこともある。木兎もそれに気づいたようだったが、目は逸らされた。その時は、きっと彼女に義理立てのようなものをしているんだろうと自分を納得させた。体に触れるのはいいのに？　と思わないでもなかったが。

「…くと…さ」

「ん？」

深く、長い口づけの合間に名を呼ぶ。

「……なんで？」

色々省略した問いでも、赤葦が訊きたいことはわかったらしい。

「してって言ってたから」

「そう言ったのは思い出しましたけど。でも、ずっと……してくれなかったのに」

「したら止まらなくなるなーって思ってたから。ちゃんと好きだって言い合ってないのに、それはダメかなーって」

「体に触るのはＯＫなのに？」

「出せば一応おさまるじゃん、男って」

「はあ」

やはり納得がいくような、いかないような微妙な返事だが、それよりももっと引っ掛か

ることを言われた気がする。
「ていうか、木兎さん俺のこと好きなんですか？　ゆうべ、好きって、言い合いました？」
「うわー……、やっぱり一番肝心なとこ思い出してないじゃん、おまえ」
「いや、俺が木兎さんに『好きです』って言ったのは思い出しましたけど」
「俺のほうが先に言ったし！」
「えー……、そうでしたっけ？」
「そうです！」
風邪が治ったら――の前、赤葦は木兎が好きだと告げたのだ。
（それよりも……前？）
正直、どちらが先に言ったとか、どうでもいい問題だ。
自分が好意を寄せる相手が同じ想いを持っていてくれた。しかもそれが同性で、絶対に叶うはずなどないと諦めていた恋だ。ずっと目を逸らして、気づかないふりをしてきた想いだった。
（そう。だから余計に思い出さないともったいないんだ）
木兎が自分に「好きだ」と言ってくれた瞬間を忘れているとか。アホか、と思う。
「じゃあ、もう一回言ってもらえます？」

「……あらためて言うの、恥ずかしいじゃん」
「好きです、木兎さん」
赤葦が面と向かってはっきりと告げると、木兎は目を見開いて狼狽えた。
「おまえ……一度吹っ切れると、ほんと……」
「ぼーくーと、さん！」
木兎はわりと往生際が悪いのだ。こうなると開き直った赤葦の方が強く潔い。
ふうっと一つ大きく息を吐いて、赤葦を腕の中に包み込み、木兎が耳元で囁く。
「好きだよ赤葦。高校の時からずっと、赤葦が好きだった」
頭の天辺から足の爪先まで、ビリビリと甘い痺れが走った気がした。
「そういうことなんで」
赤葦を抱き締めたまま木兎が体を半回転させ、仰臥する赤葦にのしかかる体勢になった。
下腹部にはすでに硬く変化した木兎のソレが当たっている。……いや、意識的に当てられている。

「……なんすか、ソレ」
「勃っちゃった」
「……」
呆れを込めて目を眇めれば、悪びれもせず木兎が笑う。
「だから、キスしたら止まらなくなるからって言ったじゃん」
それは、そう言われたけれども。……けれども！
「病み上がりで……さすがに……それは……」
「ダメ？」
「だめ……だと、思うんですけど」
欲を孕んだ金色の瞳に見下ろされ、拒む気力はどんどん萎んでいく。この男の誘いには、やっぱり、弱い。
「イヤ？」
「いや……では、ないんですけど」
「あかあし？」
甘えるように呼ばれたらもう、ダメなのだ。
腕を伸ばして、木兎の首にまわす。

「じゃあまず、ぎゅうってしてください」

「ぼ……くと…さん」
顔は枕の上に伏せたまま、赤葦は呻きと喘ぎが混ざったような声で背後の木兎を呼んだ。
「ん？　どした？　苦しい？」
と、赤葦を気遣うようなことを口にしているが、行動がまったく伴っていないから腹立たしい。この時点でもまだ、木兎の猛った性器はぴたりと閉じた赤葦の両脚の隙間をぬるぬると行き来している。
「ひどい……」
「えっ、なんで？」
木兎はようやく抽挿を止め、赤葦と並ぶようにベッドへ横たわった。赤葦は四つ這いからうつ伏せに体勢を変えたあと、これ見よがしに木兎に背を向けて寝転がる。
「どっか痛かった？」
「……痛くはなかったです……けど、さっきのあれ、嫌です……」

「んー？」
素股とかいう擬似セックスは、揺さぶられる側の精神を抉るものであった。まったく気持ちよくないわけでも興奮しないわけでもないが、なんとなく、射精するための道具にされている感があって嫌なのだ。
そんな赤葦の繊細で複雑な心境を汲み取ってくれる気は木兎にはないらしい。というか、気づいてちょっと面白がっているふうでもある。
「そりゃ本当はこっちに挿れたかったけどさ、さすがに病み上がりじゃ無理でしょ？」
こっち、と木兎は赤葦の尻のあわいに指を滑らせた。擽られるような淡い刺激に反応して背筋が震え、「んっ…」と小さく声が漏れる。気乗りしないことをされていても体は敏感になっているのだ。それが死ぬほど恥ずかしいし忌々しい。
「だったら、なにもしないでおとなしく添い寝でよくないですか？」
「ぜんぜんよくない。ていうか赤葦はそれで足りるの？」
「……足ります」
「ふうん？」
一瞬迷ってしまった言葉はたやすく嘘と見抜かれた。木兎の目の前に無防備に晒されているうなじや肩口に、啄ばむようなキスがいくつも落とされる。まるで自分が拗ねた子ど

もにでもなったような気分だ。
そうか。この人はむくれた女をこんなふうにあやすのか。
知りたくもないことを知ってしまい、鳩尾の辺りがもやもやする。
「まあ、赤葦が本当に嫌がってるなら止めるけど」
「嫌がってます」
「そうは見えないよ？」
木兎の腕が後ろから腹側にまわされ、手の平は下腹部へと這い下りた。茂みのところで少し遊んでいた指が赤葦の茎に触れて絡みつく。快楽に素直でわかりやすい男の体の構造が恨めしい。嫌だのなんだのと口にしていても、腹が立っていても、赤葦のソコは芯を持って勃ち上がっているからだ。
木兎の大きな手が赤葦のペニスを包み、揉みこむように弄る。性器に与えられるダイレクトな刺激で体が跳ね、腰の奥で快感が膨れ上がった。
「あっ……あ…っ…」
ペニスの根元から括れまでをリズミカルに扱かれ、それに合わせるように嬌声が口から零れ出る。
木兎は赤葦を背中から抱くようにして体を密着させた。木兎の体温を背中で感じたのと

同時に、両太腿の付け根の間に硬い熱を感じる。木兎の猛りがまたそこに挿し入れられたのだ。
「あ……っ、…い、いやだ…って」
「きもちいいくせに」
「いや……だ」
内腿の柔らかい部分で木兎の熱や硬さを感じさせられるのが無性に恥ずかしい、のに――。会陰や袋の裏を木兎の猛りで擦られるたびに、尻の奥から電流のような痺れが走り、赤葦のペニスの先から透明な汁が溢れる。
尻に木兎の下生えを感じるぐらい深く挿しこまれ、ぎりぎり抜けない程度まで腰を引かれる。赤葦の先走りと木兎のそれとが混ざり合い、始めはぎこちなかった抽挿が次第に滑らかになっていく。
「は……っん、あ…、ぼく…とさん……やめ…て」
逃げようとする体を強く抱えこまれ、何度も何度も激しく腰を打ちつけられた。
ふたりの荒い呼吸音、ぺちぺちと肉を打つ音、粘着質な水音が耳に響いて頭の芯が痺れる。理性がどんどん霞んでいく。嫌だと思っているはずなのに、自分から腰を揺らして木兎の手に昂ぶりを擦りつけ、快感を貪るのを止められない。思考はもう、まともに働いて

はいなかった。
「や……あ…ん、も…だめ……イク…」
「ん……俺も……イキそう」
ふたり同時に限界を宣言して、熱を弾けさせたのもふたりほぼ同時だった。

（いくらなんでも流されすぎだろ……）
熱を吐き出して冷静さを取り戻した頭で赤葦は考える。
もともと木兎の『お願い』に弱い自覚はあった。それは高校のときからだ。しかし同居を始めてからこちら、今までの比ではないぐらいガンガンに流されまくっている。
（とりあえずこの目が悪いんだよ……）
向かい合って寝そべっている木兎の顔をじっと眺め、今は閉じた瞼に隠されている金色の瞳を思い浮かべながら、胸の内で悪態を吐いた。
日本人には珍しい色をしたその瞳は、木兎の心情、要求を雄弁に語る。そして視線を合わせてしまったら最後、赤葦の意にそぐわないことだろうが、最終的には木兎の思い通りに行動させられてしまう。ほんのついさっきまでしていた行為がいい例だ。

（なんか、見えてなくても妙な圧があるし……）
隠れていても、赤葦を惑わすなにかが発せられている気がして、木兎の目の辺りを両手で覆ってみた。
「なにやってんの」
実は起きていたらしい木兎が喉元でくつくつと笑う。
「もう俺、木兎さんと目を合わせるの止めようかなって」
「んー？」
赤葦がなぜこんな奇妙なことを言いだしたのか木兎にもわかったらしく、話す声は笑いを含んでいた。
「セッターがスパイカーと目を合わせないとか、無理じゃない？」
「バレーをしているとき以外で」
「まあ、できないこともないかもだけど、赤葦はそれでいいの？」
そう言いながら、赤葦の両手を掴んで目元の覆いを外させる。
薄暗い部屋の中でも木兎の瞳は綺麗で、輝いていて強く、やっぱり赤葦を惑わすなにかを発しているような気がする。
この瞳が見られなくなったらきっと寂しい。

そしてこの瞳が、自分以外の誰かを熱っぽく映すことなど耐えられないと強く思うのだ。
「やっぱり今のナシで……」
「はいはい」
木兎の逞しい腕に引き寄せられるまま体を寄せ、首筋に顔を埋める。木兎の腕の中は相変わらず心地がいい。
（今さら変えられねえよな……）
木兎に弱いのも、木兎に流されやすいのも――。
安堵と諦めの混ざったような溜め息を吐きながら、赤葦はそっと瞼を閉じた。

『やっべー木葉、赤葦がスゲー熱！　死んじゃったらどうしよう?!』
　という、少々オーバーで物騒な電話を木葉が受けたのは、二日前の日曜の夜だ。そんな簡単に死ぬか馬鹿野郎……と思いつつも、とりあえず首や脇を冷やせ、汗をこまめに拭いてやれ、水分をとらせろ等々基本的な指示を与え、大学の帰りに様子を見に来たのが今日。
「瀕死なのは赤葦じゃなかったのか。なんでそっちのデカいほうのミミズクが弱ってんだよ？　つーか木兎、具合悪いなら自分の部屋で寝てろ。俺に風邪うつったらどうすんだ！」
「いやなら帰れ～～」
　ソファーに座った赤葦に膝枕をしてもらい、腰に両腕をまわしてお母さんに纏わりつく風邪っぴきのコドモのようなことをしているこの木兎光太郎（額には熱冷却シートが貼られている）は、一八五センチ・七十八キロのゴツい男である。張りつかれている赤葦も標準よりデカい方だから、見ているだけで暑苦しい。
　しかし高校の頃からこのふたりの距離感はこんなものなので、この光景も見慣れていると言えば見慣れている。
　木兎の頭を撫でていた手を止め、「あ」と赤葦が突然小さく声を上げた。
「木兎さんすみません、先日も木葉さんがこの部屋に来ました」
「……べつにどーでもいーよソイツは」

「そうですか」
「なんか失礼な言い方だな、おい」
木兎と赤葦の言い草に木葉が顔を顰めると、赤葦が苦笑いしながらペコリと頭を下げた。
「他の人間をここに入れたくない、と言っていたので」
「へえ。他の人間って、それは木兎の彼女も含まれんの？」
揶揄いと探りを兼ねて、先日赤葦から入手した不穏な情報を口にしてみる。
「彼女なんかいねえし！」
すかさず木兎からツッコミが入った。
おや？　と木葉は首を傾げる。
（木兎のやつ、戦略変更したのか？）
腹立たしいことに木兎光太郎は大変モテるので、昔から付き合う女に苦労したことはない。――が、どの女も「彼女」とは名ばかりの存在であった。すぐそばに本気の想い人、赤葦京治がいたのだから当たり前といえば当たり前だ。
女を取っ替え引っ替えしていたのは赤葦の気を引きたいから（発想が小学生男子並みである）……だったらしいが、肝心の赤葦は「節操ないっすよね、木兎さん」などと本人のいない所で言っていたので、木葉は木兎の見当違いなアピールに呆れ、笑いつつ、涙も流

していた。馬鹿で暑苦しい男だが、木兎光太郎は最強で、そして憎めない男でもあるのだ。
「彼女はいねえってさ、赤葦。よかったな」
「はあ。……よかった、の意味がわかりませんけど」
「この前のおまえのウジウジは、『彼女がいるくせに俺にあんなコトしやがって』ってことだったんじゃねえの？」
「ウジウジなんてしてません」
などといつもの無表情に戻って言っているが、心なしかその無表情が今日は柔らかい気がした。
それで、これはもしかして――、と思ったのだ。
「えーと……、あんまり突っ込んで訊きたくはないんだけど、おまえら……ついに？」
「めちゃめちゃ突っ込んで訊いてますよね、それ」
「越えた？　一線」
「ご想像にお任せします」
「いや、想像なんて全然したくねえんだけど」
しかしもう想像するまでもなかった。違うなら違うと、この男ならばっさり斬るからだ。
高校時代から、このふたりが両想いなのは、このふたり以外なら誰でも気づいているこ

とだった。
焦れったい、歯痒い、もどかしい……と思いつつも静かに見守ってきた身としては、
「ついにか。おめでとう！」という親戚的感慨がないこともないのだが――。
「あかあしー」
「はいはい」
頭を撫でる手が止まっている！　とゴツい男が甘ったれた催促をして、同じくわりとゴツい男がなんの疑問も抵抗もなくそいつを甘やかす。
これも高校時代から見慣れた光景なんだけれども。
いやいや、こんな光景見慣れたくねえよ！　とも木葉は思うわけだ。……めちゃくちゃ今さらだが。
「赤葦、あんまり甘やかすなソイツ」
無駄なこととは知りつつ忠告してみる。
そして速攻で、やっぱり無駄だったな、と木葉は思い知らされるのである。
「はあ。……でも俺、結構好きなんですよね」
「なにが」
「この髪。ふわふわ柔らかくって」

今日はミミズク型にセットされていない木兎の銀髪に指を絡めながら赤葦が言った。
「……ああそうかよ」
なにが、髪が好き、だ。
全身で、その男のすべてが好きだ、と言っているくせに。
ああもう、ほんとやってられねえ。
「帰る」
来た時の三倍の疲労感を抱えながら、木葉はふたりのマンションをあとにした。

まあ、一緒にいない木兎と赤葦など想像もできないわけだし。
相変わらずの光景を見られることが平和――なのだ。
……たぶん。

あいも変わらずな日々（了）

俺は自他共に認めるバレー馬鹿だ。

スポ少時代から「練習休み」なんていらないって本気で思っていた子どもで、大学生になった今でも基本的にそのバレー馬鹿っぷりは変わっていない。オフの日は体も頭もムズムズと落ち着かなくて、飯を食ってる時でさえも「バレーやりてえ！」なんて考えていたりする。

「じゃあやれよ。俺は止めねえ。思う存分好きなだけバレーやってろ。今からでもやってこい、ほら」

月に数度の完全オフ日。昼飯には少し早い時間に、俺は近所のファミレスで木葉と茶を飲んでいた。和やかに……ではない。

今の木葉の台詞は、俺の「バレーしてえ……」という呟きに対する答えだ。

「木葉、トス上げてくれるの？」

「嫌に決まってんだろ。俺を巻き込まずに好きなだけやれって言ったんだ。っていうか、それを言うために休みの日の朝っぱらからわざわざ俺を呼び出したのか？　木兎てめえフザけんなよ?!」

「違う～……」

赤葦は週明け提出のレポートを仕上げるために朝から図書館に行ってしまった。家だと

俺が邪魔するから全然進まない!!　と、こめかみに青筋を立てて。
だから木葉を呼び出して話を聞いてもらおうと思ったのだ。最近の俺の悩みってやつを。
いや、「赤葦がつめたい～……」とか、そういう悩みではないよ？
「じゃあなんなんだよ」
うんざりしているのを木葉は微塵も隠さない。それでも一応訊いてくれる。
「俺……もうこれ以上、赤葦と一緒の部屋に住んでいられない」
俺が言い終わるや否や木葉は耳を両手で塞ぎ、露骨に「これ以上聞きたくありません」アピールをした。
なんでだよ、聞いてくれよ俺のこの切実な悩みを！
大学の友だちは俺と赤葦の関係を知らないから話せない。俺は別にカムアウトしてもいいのだが、赤葦が嫌がるのだ。
え？　当たり前だって？
でもいつの間にかバレていたりする。高校の時もそうだった。俺が赤葦のことを好きなのは、赤葦以外ならみんな知っていた。
うん、そうそう。わかってる、全部俺のせいなのだ。全身から発してしまう赤葦好き好きオーラのせいなのだ。

え？　少しは隠す努力をしろ？
うん、だからそれはわかってるんだけど……。
「っていうか木葉、全部聞こえてんじゃん？」
「てめえの声がデカすぎんだよ！」
「だっておまえが耳を塞いでるから大きい声のほうがいいかな、って」
「それだけ聞きたくねえってことだろうがそれぐらい察しろよこのアホミミズク！」
ノンブレスで言い切って手元のグラスの水を飲み干し、「で？」と仏頂面で不機嫌な声を出す。
だからおまえさ、結局聞いてくれるなら無駄な抵抗しないで最初から素直に聞いてくれればよくね？　とは思ったが、それは言わないでおいた。
「一緒に住めないっていう理由は？　同棲やめてどうすんの？　ていうか赤葦はそれ納得すんの？」
木葉が畳み掛ける。
『同棲』という単語が、胸と下腹にズンっと響いた。だって『同棲』って、めちゃめちゃえっちな響きの単語だ。
そうそう、俺と赤葦の『同居』は先日『同棲』に変わったんだよ〜　と、にやけそうに

なる顔を引き締める。
そういえば俺と赤葦がちゃんとくっついたことも木葉はすぐに察知した。すごいよな。目は細いけど色んなこと見えてんだな、おまえ。――っと、思考が横に逸れてしまった。
「なに言ってんの木葉。同棲やめるわけないじゃん。へんなこと言うなよ縁起でもない」
「おまえ……ふざけてんの？」
呆れる木葉を尻目に、俺は目頭を揉みながら嘆きを零す。
ちなみに俺は大真面目だ。
「ぜんぶ……赤葦がえろすぎるのが悪いんだ……。赤葦がえろすぎて、俺もうどうしていいかわかんないんだ……」
すると、「それは悩みじゃなくてノロケっていうんだ馬鹿野郎」と、木葉がマリアナ海溝よりも深――い溜息を吐きながら言った。

ファミレスの前で憔悴しきった木葉と別れてマンションに戻ったのは、まだ夕方にもならない時間だった。当然のことながら赤葦は部屋に戻ってはいない。だから時間をかけて

自室と共用部分の掃除をして、洗濯をして、それでもまだ赤葦は帰ってこなかったから夕飯の買い物に行き、夕飯の下ごしらえなどをして過ごした。

赤葦がそばにいるのが当たり前の時間に慣れてしまうと、ひとりでいるのがやたらとさびしく感じる。まあ、バレーの遠征や合同練習などで俺の方が部屋を空けることが多いのだが。

そんな時、赤葦はさびしいと感じてくれているのだろうか？　訊いてみたい気もするが、「いえ。わりと清々してます」なんて答えられたら（素で答えられそうだから怖い）悲しくなるので訊けない。

ああもう、早く赤葦帰って来ないかな～……なんて思っている間に、俺はソファーでうたた寝をしてしまっていたらしい。

フルーティーな甘い香りに鼻孔を擽られて目が覚めた。

視線を動かすと、すぐそばに赤葦の背中があった。床に座り、俺が寝転がっているソファーに寄りかかっているらしい。風呂に入ったばかりなのか髪がまだ濡れていて、タオルでわしわしと頭全体を拭っている。

赤葦は髪の癖をちょっと気にしている。だったら丁寧にタオルドライしてからちゃんとドライヤーで乾かせばいいのに、それは面倒くさがる。こういう所、赤葦は意外に大雑把

で雑なのだ。
ちょっと前屈みの体勢だから、赤葦のうなじは剥き出しになっている。そこにぽこりと浮かぶ頚椎のでっぱり。
俺は上体を少し浮かせて、そこのでっぱりをベロンと舐めた。……ほんの、軽いイタズラのつもりだった。
「っんぎゃっ」
奇妙な声を上げ、赤葦の体がびくんと大きく跳ねた。
「ぷはっ！　赤葦、『っんぎゃっ』ってなんだよー」
予想以上の珍反応に笑ってしまう。しかし――。
「いきなりっ…そういうことしないでください！　びっくりします！」
うなじを押さえながら振り返った赤葦の顔や耳や首筋が真っ赤に染まっていて、めっちゃ狼狽えていて、俺もつられて狼狽えてしまった。
「あ……うん、ごめん……」
だってその赤い顔が、潤んだ瞳が、アレの最中に必死で声を我慢している時と一緒だったからだ。
うわー……赤葦、そういう顔しちゃダメ。俺に見せちゃダメ。いや、アレの最中は見せ

てくれていいんだけど、そうじゃない時にそういう顔をしたら危険。おまえの身が危ないんだよ。

今日、木葉に相談した悩みというのがコレだ。赤葦の表情や仕草がえろすぎて、俺は四六時中盛った状態になってしまっているということだ。

しかし、ムラっときたらすぐセックス！　なんてことはできない。一応俺も理性ある人間だ。

それに、男同士のセックスは受ける側にかなりの負担が掛かるから、平日は当然避けなくてはならないのだ。

つまり、えろい赤葦を前にして、お預けの日々が続いて苦しい……ということなのである。

あームラムラする……。

「起きるなら普通に起きてくださいよ……」

「うん、ごめん。……レポート、終わった？」

「はあ。なんとか」

「風呂入ったの？」

「はあ。図書館暑くて汗かいたんで。帰ってきてすぐにシャワー浴びました」

「シャンプー変えた？　なんかいい匂いするなーって起きたんだけど」
「はあ。駅前のドラッグストアで安売りしてたやつですが」
「ふうん」
　他愛のない話をして一生懸命「ソッチ」の方から気を逸らそうとしたが、一度そういう欲を覚えてしまうとダメで、息をするだけでも腹の底にじわじわと熱が溜まってしまう。
「あのさー、赤葦」
「はい」
「俺、高校の時からずっとおまえのこと好きだったんだよ」
　赤葦に告白するのはこれが初めてではない。でも、目を合わせながらは照れくさすぎて、ソファーに仰臥したまま顔を両手で覆いながら言った。
「はあ。それはこの間聞きましたし、俺も高校の時から木兎さんが好きでしたよ。はっきり自覚したのは最近ですけど」
「うん……」
「それがどうかしたんですか？」
　黙りこくってしまった俺を怪訝そうに見つめている気配がする。声には不安が滲んでいる気がした。

「木兎さん？」
　ああごめん、違うんだ、深刻な話をしたかったわけじゃない。上体を起こし、宥めるように赤葦の頭を優しく撫でた。
「赤葦が大学生になったら一緒に住みたいなってずっと思ってて、一緒に住めるようになったときはすげー嬉しかった。でも、一緒に住むっていう夢が叶ったら今度は赤葦に触りたいなって思うようになって、赤葦に触れるようになったら今度はえっちしたいなって思うようになった。……そういう欲ってキリがないの。俺、赤葦といるとえっちなことばっかり考えちゃうの。もう、いつもの抜きっこだけじゃぜんぜん足りない……」
　赤葦は黙って目を瞬いていたが、瞬間湯沸かし器みたいにボンッと顔を真っ赤にして狼狽えた。
「な、なに言ってるんですかバカですかそんなこといちいち報告してくれなくてけっこうです！」
「おまえ、狼狽えると言葉がヘンになるよね」
「うるさいです。知りませんそんなこと……」
　ソファーに突っ伏してぶつぶつ言っている。髪から覗く耳の縁はまだ真っ赤だった。
「ああもう……。なんでおまえそんなにえろいの……」

「……は？」
「我慢、つらいんだよ……」
「は？？」
ぶっちゃけて言うと、わりと頻繁に抜き合いをしているから溜まっているわけではないのだ。ただ、赤葦の中に入りたい、赤葦の中で果てたい、そんな自己中な欲望が脳内を占めている。占めまくっている。そして俺の股間はもう我慢の限界だって叫んでいた。爆発しそうだった。
今日は待ちに待ったオフ日だ。赤葦のレポートも終わったと言っていた。
だからどうか許してほしい。
「あかあし……、えっちしたい」
ド直球に訴えた。こういうお誘いは、遠回しより直球の方が赤葦に効くことを俺は知っている。
「え……」
「あかあしはしたくない？」
「だ…ってまだ、夕方です…よ？」
「うん、知ってる。でも、したい。……ダメ？」

俺から逸らした顔を追いかけるようにして、赤葦と視線を合わせる。赤葦が俺の目に弱いのも知っている。

「あかあし」

甘えるように名前を呼べばもう、赤葦は拒めないのだ。

「……リビングでは、ちょっと……」

ほら、ね。

「んっ、んっ…っ、んっ」

俺が奥を突くたびに、口を覆った両手の指の隙間から小さな声が漏れる。喘ぎ声というよりは呻き声に近い。多分息があまり上手く吸えてないんだろう。赤葦は目を瞑り、眉根を寄せて苦しそうにしている。

俺は特に嗜虐趣味があるわけじゃないが、赤葦のこの苦し気な表情を見ると、腹の底からぐわぁっとくるものがあった。意地悪をしたいわけじゃないのに、赤葦の弱いところを

狙ってがつがつ突いたり、逆にイイところを避けて焦らす、とかしてしまう。
「ぼ……くと…さ」
「んー？」
ゆるりと繰り返していた抽挿を止めると、赤葦はほっとしたように一つ息をついて目を開けた。
「こえ…出ちゃう……、も……苦しい…です」
「……」
……なんだよ、それ。
それって、俺に尻の中を突かれて擦られて気持ちよくて声を我慢するのが苦しい、ってことだろ。
おまえね、こういう時にそういうこと言っちゃダメだよ。
「え……なん…で」
さっきよりも体内で膨らんだ俺にびっくりして赤葦が目を瞬かせた。
「あかあしが煽るからでしょー」
「あお…って……ない…」
「無自覚、ほんと危険」

「なに……いっ…、あぁ…っ！」
赤葦の両足を抱え直して大きく腰をグラインドさせ、熱く熟れた赤葦の中を俺のモノで激しく掻き回した。いきなりの強い刺激に、赤葦は堪らず高い声を上げる。
「ああっ…！　やめ…っ…、まっ…て…！」
「あかあし、声出しちゃダメでしょ。隣りに聞こえちゃうよ？」
俺の意地悪な台詞に赤葦は目を見開いて、また手で口を覆いながら小刻みに首を振った。両の目に薄く涙の膜が張っている。
その少し怯えたような、困ったような怒ったような表情を見ると、背筋にぞくぞくとした快感がはしって、俺のモノにまた力が溜まる。
赤葦は嫌だって言っていたのに、それを無視してリビングで服を脱がせ、ソファーに押し倒したのは俺だ。このソファーは隣りの部屋と接する壁のすぐ脇に置いてあるから、少し大きな声を出したら聞こえてしまう。実際、俺と赤葦がお互いの体に触り合うようになったきっかけは、隣りから聞こえてきた女の嬌声だ。
だから赤葦はリビングでするのをすごく嫌がるのだが、リビングでしている時の赤葦の感度はいつもの数倍良くなる。赤葦は気づいているのかいないのかわからないけれども。
堪えきれなくなったのか、赤葦の目からぽろぽろと大粒の涙が零れていた。痛い思いを

させて泣かせたいわけじゃないが、この涙は痛みのせいじゃないと知っている。涙が溢れるたびに俺の腹の熱も膨らんで、今すぐ、ここで、めちゃくちゃに貪ってしまいたいと凶暴な欲が脳内で叫びだす。
　でも、これ以上はダメだ。口では嫌だって言ってても下の口は嫌がってないよ？　とかＡＶもどきの最低な台詞を言いたくなったけどダメだ。
「あかあし、俺にしっかり掴まってろ」
「え？　……はい？？」
　赤葦の両腕を俺の首にまわさせ、赤葦の尻に手を添え、よっこらせと赤葦の体を抱き上げた。
「え、ちょっ、なにっ……」
「ここじゃ集中できないんだろ？　だからおまえの部屋まで運ぶ！」
「なっ、なんでこのまま運ぶんだよ！　んんっ…抜けよ…いっかい！」
「え、とりあえず一回イッていいの？」
「そっちの『抜け』じゃねえよ！　は…あぁ…ちんこを！　抜け！」
「やだ！　っていうかさっきからあかあし中しめまくってる！　ダメ！　ゆるめて！」
「あっ、あ…んっ……無茶…言うな!!」

自重で常になく深いところまでオレが入りこんでいる上に、俺が一歩を踏み出すたびに、俺のモノが尻の奥を突いてしまっていたらしい。その刺激に耐えようとしてか、赤葦の内部はぎゅうぎゅうと俺を締めつける。そして、嬌声と悪態を同時に叫ぶという器用なことをしていた。

俺たちのアホな怒鳴りあいは隣りに丸聞こえな気がしたけれど仕方ない。

リビングから赤葦の部屋までは数メートルもないのだが、ようやくベッドに辿り着いた時は、バレーの通常練習＋自主練一時間＋五十メートルダッシュ数本をこなしたあとのような疲労具合いだった。

体力自慢の俺でさえキツかったのだから赤葦はさぞかしキツかっただろう……。ちょっとばかり申し訳ない気持ちで、俺の下で寝転がっている赤葦の様子を窺った。

俺の首にしがみついていた両腕は解かれ、今は顔の上半分を覆い隠している。肌はピンク色に染まっていて、汗でしっとりと濡れていて、半開きの唇からは荒い吐息が漏れていた。……ああえろい。

いやいや、だからいまはそれどころではないのだ。

俺と赤葦の腹に挟まれていた赤葦のペニスは、先ほどよりも硬度を失っていた。というか、明らかに先走りでないもので濡れ光っている。俺と赤葦の腹や胸も濡れている。

「えーと……、これ、もしかして……？」
「……うるさい」
もしかしてもなにもなかった。赤葦は後ろだけの刺激で達してしまったのだ。その事実に感動し、びくんと反応した俺のモノに気づき、赤葦が氷点下の声音でぴしゃりと言い放つ。
「抜いてください」
「いや、あの……」
「いますぐ抜け。達けってことじゃなくてソレを抜け！」
「う……」
でも俺まだ達ってないし――などと言える雰囲気では全然なく……。渋々ながらゆっくりと腰を引いた。
途中、赤葦が「んっ」なんて可愛い声を出したものだから、思わず中に引き返しそうになったが、それを敏感に察知した赤葦が脇腹に本気の膝蹴りを入れてきたので、やはり退却するしかなかった俺である。

「ねえ赤葦、ごめんってば」
赤葦からの本気の膝蹴りを食らってからおよそ三十分。
俺が赤葦の中から出るや否や、赤葦は上掛けを引っ被って亀になってしまった。俺がなにを話しかけてもベッド上の亀はウンともスンとも言わない。もしや寝てしまったのか？と亀の上に覆い被さってみたら、「重いんだよこのゴリラ！」と暴言を吐かれた。寝ていなかったらしい。
「あかあしぃ……、出てきて……お願いだから」
俺の本気の懇願に、ようやく布団の中からくぐもった声が返ってくる。
「木兎さんなんか……嫌いです」
「え、嘘、やだ。ごめん赤葦嫌いとか言わないで!!」
「……ぜんぶが嫌いなんじゃなくて、俺が嫌だって言ってるのに聞いてくれない木兎さんが嫌いです……」
「うん、ごめんなさい。もう赤葦が嫌がることはしないから。だから顔見せて」
それでやっと顔を出してくれたのだけれど、泣き腫らした目が痛々しくて、俺は今までになく深く深く反省した。

えろい赤葦を見てムラっとしても我慢だ、ひたすら我慢だ。赤葦と一緒にバレーができて、一緒の部屋に住めて、一緒に楽しい時間を過ごせているのだ。最高に幸せなことじゃないか。それ以上を望むなんて贅沢だぞ木兎光太郎！

「ほんとにごめんね、赤葦。俺、もう赤葦が『して』って言うことしかしないからね！なんならエロは封印するから！」

高らかに宣言した俺を、赤葦は胡乱げな目で見ている。

「ふぅん」と唇を尖らせたあと、こてんと小首を傾げて俺に両手を差し出した。

「じゃあ、ぎゅうってしてください。それからキスして」

「……はい。……えーと、その先は？」

「さあ？　俺の気分次第じゃないですかね」

今の赤葦は素っ裸の上に薄い布団を引っ掛けただけの格好だ。すっきりと伸びた首筋も、その下で小さくツンと存在を主張している両胸の飾りも、まだ少し上気した肌も、俺がつけたえっちな印も縦長の可愛いヘソもその下の黒い繁みも大事なトコロもぜんぶぜーんぶ丸見えだ。

こんなえっちな赤葦をぎゅうってしてキスしてその先はおあずけかもって――。

「え、おまえ鬼なの？　小悪魔なの？　ていうかさっきの発言撤回していい？？」

「ぎゅうって、してくれないんですか？」
魅惑的な笑みを浮かべて赤葦が俺を誘う。これに食いつかないでいられる男がいたら会ってみたい。いや、俺以外が食いついちゃったら困るんだけど！
「いえ。します！　よろこんで！」

あいも変わらずな日々・後日談（了）